

令和 2 年 6 月 1 日現在

機関番号：33702

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02470

研究課題名(和文) 五代目市川海老蔵の東海地域における芝居興行に関する調査・研究

研究課題名(英文) Research and Study of Ichikawa Ebizo V Performances in the Tokai region in the Late Edo Period

研究代表者

木村 涼 (KIMURA, Ryo)

岐阜女子大学・私立大学の部局等・准教授

研究者番号：70546150

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、「歌舞伎十八番」の制定や「勸進帳」創作などで知られる江戸歌舞伎の代表的役者、五代目市川海老蔵(=七代目市川團十郎)の東海地域(愛知、岐阜、三重、静岡)における芝居興行の究明を目指したものである。海老蔵が、4つの地域に出演した芝居興行を検討、考察した。その成果として、海老蔵の東海地域における芝居出演の具体的な事柄(開催小屋、開催日数、演目、共演者など)が判明した。また、観客の芝居に対する意識や、各地域社会の芝居興行への結びつきも見えてきた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、江戸時代に三都(江戸・京・大坂)の芝居小屋に所属している歌舞伎役者の地方興行に関する研究が十分な進展を見せているとは言えない状況下、五代目市川海老蔵の東海地域における演劇活動について調査し考察を加えた。「芝居番付」「芝居台帳」や「役者評判記」などを活用しながら、諸機関所蔵の興行関係資料も用いて、東海地域の芝居興行の具体的内容を示したという成果に学術的意義が認められる。また、五代目海老蔵研究において、従来判然としていなかった地方興行に対する地域の人々の支援などの解明を進め、東海地域の文化の広がり的一端を明示するという成果に社会的意義もあると考える。

研究成果の概要(英文)： The aim of this study was to shed light on performances by Ichikawa Ebizo V (also known as Ichikawa Danjuro VII), a prominent Edo-period kabuki actor known for the establishment of Kabuki Juhachiban (repertoire of 18 kabuki plays) and the production of the Kanjincho, in the Tokai region (Aichi, Gifu, Mie, and Shizuoka prefectures).

The study investigated and researched performances in which Ebizo appeared in the four Tokai prefectures, and enabled clarifying specific details (theaters, lengths of runs, programs, other actors who also performed, etc.) of the performances, as well as attitudes toward them among audience members and connections with theatrical performances in each of the local communities.

研究分野：日本近世文化史

キーワード：五代目市川海老蔵 東海地域 地方興行 地域社会

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 五代目市川海老蔵(天保3年 1832 3月、長男に八代目を譲り自身は五代目海老蔵と改名)こと七代目市川團十郎(寛政3年 1791 4月~安政6年 1859 3月23日)は、近世後期の江戸歌舞伎における中心的存在で、「歌舞伎十八番」の制定や「勸進帳」を創作した人物であることは知られている。さらに、広い芸域を誇り、お家芸の荒事は勿論、時代物、世話物、所作事に至る迄、どんな役柄にも卓抜した演技力を発揮し、圧倒的な存在感を有した人物である。

また、七代目は五代目海老蔵と改名した後、老中首座水野忠邦による天保改革において、風俗取締政策の一環である奢侈禁止令に抵触したとして、天保13年6月22日、南町奉行鳥居耀蔵から江戸十里四方追放を申し渡された人物でもある。追放処断からおよそ8年後に赦免され、江戸の舞台に復帰する。こうした経緯もあり、海老蔵の生涯における江戸以外の地域での芝居興行は、代々の團十郎と比べても圧倒的に多い。そこで、海老蔵の江戸以外の地域での芝居興行を究明することが、喫緊の課題であると考えた。

(2) 文化・文政期以降、海老蔵をはじめ、江戸・京・大坂という三都で活躍している歌舞伎役者の三都以外の地域での芝居興行が盛んになってくる。それにも関わらず、江戸歌舞伎役者の地方興行についての研究は、依然として十分に進展しているとは言えない状況でもある。

(3) そこで、本研究では、筆者が岐阜女子大学に所属していることもあり、その地域性を活かして、五代目海老蔵改名後の東海地域(本研究で定めた東海地域とは、現在の愛知県、岐阜県、三重県、静岡県)の4県を指す)の芝居興行を究明することが、海老蔵と地域社会に住む人々との結びつきの実態を示すことにもなり得ると思に至った。

2. 研究の目的

(1) 本研究は、特に、七代目團十郎が五代目海老蔵と改名後、江戸以外の多くの地域で行われた芝居興行を検討することによって、その実態の解明を目指すものである。今回、海老蔵の東海地域における芝居興行について、まずはその内容を具体的に追究することを目的とした。

(2) 次に、五代目海老蔵の東海地域における芝居興行に関する資料を中心として、海老蔵の興行が東海地域の人々にどのように受容されたのか、地域の人々は芝居興行にどのような支援をしていたのか、また、海老蔵の興行の上演形態、契約内容をはじめとする興行の具体的な構造について明らかにすることを目指した。

3. 研究の方法

(1) 本研究は、海老蔵の東海地域における演劇活動について、従来の「芝居番付」や「芝居台帳」、「役者評判記」なども参照しながら、諸機関に所蔵されている興行関係資料を用い、東海地域の興行形態及び当該地域における人々との結びつきを明らかにしていくという手法をとった。

(2) 具体的には、まず、東海地域の4県の諸機関所蔵の目録を精査し、関連史資料をリストアップした。そして、五代目市川海老蔵関連資料をはじめ、東海地域の「芝居番付」等の基礎資料が揃っている早稲田大学演劇博物館から該当資料の調査・収集作業を開始した。

(3) 次に、東海地域の芝居興行関連資料が存在する諸機関を訪れ、『御用留』、『御用日記』や人々の観劇の記録等の史資料を複写し整理した。そこから、海老蔵と東海地域の芝居興行の仕組み及び海老蔵と地域社会に住む人々との結びつきの実態を把握しようとした。

(4) 当時、駿河国富士郡神谷村(現静岡県富士市)には、眼科医六代目伊達本益が居住していた。本益と海老蔵の関係は次の通りである。ある年、旅に出た海老蔵一行は、駿河の名勝地、左富士で休んでいた。皆が左を向いて富士を眺めている時、海老蔵一人が、反対方向の右側を向いて富士があると云って眺めていた。そこで一同は海老蔵の目が悪いことに気付き、伊達本益の元を訪れ、海老蔵は治療を受けた。これより、市川團十郎家と伊達家の家族ぐるみのつき合いが始まったと伝えられている。以後海老蔵にとって伊達家は大きな支援者といえる存在になる。海老蔵の東海地域の芝居興行にもどのように関わってくるのか、伊達家所蔵の資料を検討した。

4. 研究成果

(1) 五代目市川海老蔵の東海地域における芝居興行は、「三ヶ津」(=三都)に加え、「四ヶ津」という言葉が登場するほど、芝居が盛んな地域である尾張名古屋の芝居小屋への出演が多い。海老蔵は、名古屋において若宮芝居と橘町の芝居、清寿院芝居に出演している。

天保8年(1837)6月、8月の2ヶ月間、海老蔵は、「市川海老蔵」の名で若宮芝居に出演している。(名代:松本屋増太郎・千代屋蝶 長七)当興行が、海老蔵の名古屋初見参と思われる。

海老蔵は、6月には「弓張月佐野聞書」にて佐野源左衛門、和泉ノ次郎親平、「ひらかな盛衰記」にて、梶原平次、舟頭松右衛門実八樋口次郎兼光、「扇源平躑躅」にて熊谷次郎直実を勤めた。また、芝居番付には、海老蔵が今回、名古屋の芝居小屋初出演ということもあり、「扇源平躑躅」の外題上に「御目見江狂言」と記されていた。

次に、8月の「一谷嫩軍記」(大序より三段目迄)にて熊谷次郎直実、「御詠博多織」にて毛剃九右衛門、成田屋嶋の小平次を勤めた。さらに同月、名古屋若宮芝居の「御暇乞狂言」として、「裏表忠臣蔵」(十一段を幕有幕無し廿二段続)にて、桃ノ井若狭之介、早野勘平、斧定九郎、飾磨宅兵衛、寺岡平右衛門、天川屋義平、大星由良之助を演じ、「道行旅路の花聲」(第四段目の裏)でも早野勘平を勤め、若宮芝居の千秋楽を迎えた。

(2) 嘉永元年(1848)8月、9月の2ヶ月間にわたって、江戸十里四方追放中の海老蔵は「幡谷重蔵」の名で、清寿院芝居に出演した。(名代：稲葉屋伊八)海老蔵は8月、「源平布引滝」(物語の段)では斎藤実盛、切狂言「米浜救入船」にて黒舟ノ忠右衛門を勤めている。翌9月、「裏表萬葉 仮名手本双清書」(二十二段続き)にて、桃ノ井若狭之介、道行勘平、寺岡平右衛門、飾磨宅兵衛、切狂言「世話料理八百屋献立」にて、八百屋半兵衛を勤めている。

(3) 嘉永3年(1850)2月、海老蔵は、橘町の芝居に出演している。(名代：山城屋清兵衛、太夫本：中村津多右衛門)

この2ヶ月前の嘉永2年12月、翌同3年1月と2ヶ月続けて海老蔵は、美濃国伊奈波神社境内の芝居小屋に出演していた。伊奈波神社は岐阜地域第一の神社である。伊奈波神社一帯は、岐阜町周辺の最大の娯楽の場であり、江戸や上方の役者が来訪し歌舞伎を上演し、「因幡(稲葉)芝居」と呼ばれていた。

因幡芝居にて、海老蔵は、12月に斎藤別当実盛、幡随院長兵衛を演じ、翌年正月には「忠臣蔵裏表幕有幕無し」にて「成田屋七左衛門」の名で出演し、桃井若狭之介、大星由良助、斧定九郎、飾磨宅兵衛へ実八寺岡平右衛門を演じ、いずれも大評判の舞台となっていた。(名代：大黒屋久四郎、太夫本：播磨屋音治郎)なお、「成田屋七左衛門」とは、海老蔵の祖父五代目團十郎が寛政8年(1796)11月、都座(中村座の控櫓)において、引退興行をした後に初めて用いた名である。

因幡芝居に出演した海老蔵は、江戸十里四方追放中の身であった。大好評の因幡芝居に出演している海老蔵のもとに江戸十里四方追放の赦免の知らせが届いた。海老蔵は、一旦、大坂へ戻り、それから江戸へ向かった。

ところが、江戸へ向かう途中の嘉永3年2月に海老蔵は、名古屋に寄り橘町の芝居に出演した。海老蔵は前狂言「一谷嫩軍記」(大序より三段目迄)にて熊谷次郎直実、切狂言「侠詞花川戸」にて幡随院長兵衛を勤めた。この時海老蔵は、「一世一代」と銘打ち「成田屋」の名で5日間だけの出演を果たし、2月29日に江戸へ到着した。

(4) 嘉永5年6月、7月の2ヶ月にわたって、海老蔵は「成田屋七左衛門」の名で、橘町の芝居小屋に出演している。(名代：山城屋清兵衛、太夫本：播磨屋音治郎)

まず、6月28日から7月5日まで、「神霊矢口渡」(大序より四段目迄)にて由良兵庫之介、渡し守頓兵衛、「一の谷咲分躑躅」にて蓮生坊、大切「五大力恋緘」にて勝間源五兵衛を勤めた。およそ1週間の興行は「大入」続きであった。

次に、10日後の7月15日から「幕あり幕なし十四段返し」の「増補裏表 仮名手本忠臣蔵」(大序より大切迄)にて、桃井若狭之介、斧定九郎、矢間重太郎、寺岡平右衛門、大星由良助を勤めた。また、当興行は、海老蔵の橘町芝居の「御名残」興行であった。

(5) 嘉永7年(1854)3月から5月までの3ヶ月連続で、海老蔵は「成田屋七左衛門」の名で若宮芝居に出演している。(名代：松本屋増太郎、太夫本：中村津田右衛門)

海老蔵は、3月24日からの「菅原伝授手習鑑」(大序より五段目迄)にて延喜帝、母覚寿、藤原時平、「大賀清忠草帛」にて大賀悦善介勝元、足利義政、切狂言「極彩色梅月由」にて梅堀ノ由兵衛の6役を勤めた。翌4月14日より3月と同様の「菅原伝授手習鑑」(大序より五段目迄)にて延喜帝、伯母覚寿、藤原時平、「大賀清忠草帛」にて大賀悦善介勝元、足利義政、そして今月新たな芝居として、「歌舞伎十八番之内」と銘打って「景清」を上演し悪七兵衛景清を勤めた。切狂言として「義経千本桜」(三段目口・三段目切)にて、いがみの権太を勤め、前月より1役多い7役を勤めた。翌5月4日より「時今桔梗盛」(大序より十段目迄)にて武智光秀、春永弾正、三好存保、茶道国阿弥、「夏男江戸染」にて三筋綱五郎、幡谷村百姓十蔵を勤め、7日後の5月11日からは「妹背山婦女庭訓」(三段目)も上演され、海老蔵は、大判事清澄を勤めた。

また、海老蔵は翌6月、岡崎六地藏芝居において「成田屋七左衛門」にて出演している。その後、6月24日より熱田亀井山御境内の芝居においても海老蔵は、「成田屋七左衛門」として出演している。(名代：浅野屋勝治、太夫本：中村津田右衛門)この時、海老蔵は、「一谷嫩軍記」(大序より三段目迄)にて参議経盛、熊谷次郎直実を勤め、切狂言として「夏男江戸染」にて三筋綱五郎、幡屋村重蔵、壽海庵長久、正木蔵之進を勤めている。

(6) 閏7月1日からの若宮芝居は、海老蔵と長男八代目との共演であった。(名代：松本屋増太郎、太夫本：中村津田右衛門)海老蔵は「成田屋七左衛門」、八代目は「成田屋八代目」と

名乗った。この時、江戸で人気絶頂期であった八代目が出演するので、名古屋初見参の八代目に対する人々の熱狂振りは凄まじく、八代目見たさに近年にないほど多くの人々が芝居小屋へ押し寄せた。また、この熱狂に乗じて、八代目関連商品も売り出され、名古屋の町中が八代目一色に染まる程であった。

「与話情浮名横櫛」の「大序」では「お目見得だんまり」として、海老蔵は大仁坊木場七、八代目は悪七兵衛景清を勤めた。その後本筋に戻って、八代目の伊豆屋与三郎に対して、海老蔵は、和泉屋多左衛門と観音久次を勤めた。続いて、「魁源平躑躅」扇屋の段にて、海老蔵は扇屋上総、八代目は熊谷次郎直実を勤め、切狂言「歌舞岐曾我物語」対面の段にて、海老蔵は曾我五郎時宗、八代目は五郎の兄の曾我十郎祐成を勤めた。全ての演目において、海老蔵、八代目の親子共演が実現した。

また、この興行は、八代目一人の手柄で大盛況の興行になったといわれたほどで、後日狂言が組み入れられることになった。後日狂言は、閏7月19日からで、「裏表忠臣蔵」大序より大切までにて、海老蔵は足利直義公、加古川本蔵、斧九太夫、斧定九郎を、そして八代目は高師直、飾磨宅兵衛、早野勘平、大星由良助を勤めた。「檀浦兜軍記」琴責の段にて、海老蔵は岩永左衛門、八代目は秩父庄司重忠を勤めた。結局、この興行が海老蔵と八代目の最後の親子共演となってしまった。海老蔵、八代目は名古屋での芝居の後、共に大坂の舞台を勤めるはずであったが、大坂の舞台初日に、突然、八代目が謎の自殺を遂げてしまったのである。

(7) 伊勢古市は、芝居興行の盛んな地域で、京・大坂の歌舞伎舞台への登竜門でもあるとされていた。海老蔵が伊勢古市の芝居に出演した最初は、文政13年(1830)4月、5月の2ヶ月であった。(座元：岩井久米之助、名代：岩出屋勘左衛門)

なお、この時は、海老蔵に改名する前の七代目團十郎だったが、俳名「市川白猿」の名で出演した。4月は、「廓粧濡稲妻」にて不破伴左衛門、三筋の綱五郎、梅津嘉門を勤め、切狂言の「五大力恋緘」にて勝間源五兵衛を勤めた。翌5月、「いろは蔵双合鑑」にて矢間重太郎、桃の井若狭之介、斧定九郎、早野勘平、大星由良之助を勤め、切狂言「恋飛脚大和往来」にて榎屋次右衛門、新口村忠三郎を勤めた。

天保14年(1843)5月14日、江戸十里四方追放中の海老蔵は、伊勢古市の芝居に「幡谷重蔵」の名で出演している。(座元：中村辰之助、名代：久馬屋武兵衛)これは、成田山末寺延命院に蟄居していた海老蔵が高野山に赴き、二代目團十郎が建立した初代團十郎の供養塔の修復をし、成田へ再び戻る途中の出演であった。海老蔵は、「神霊矢口渡」にて由良兵庫、渡し守頓兵衛、「夏祭浪花鑑」にて團七九郎兵衛を勤めている。

そして、跡継ぎである八代目を失った翌年の安政2年(1855)5月、6月と2ヶ月間、海老蔵は市川家と縁のある「松本幸四郎」の名(四代目團十郎の前名・後名、五代目の前名)で伊勢古市の芝居に出演している。(名代：兜屋友吉、太夫本：中村津多右衛門)

5月の初日は10日で、前狂言「大河捌」にて大河悦善之介、「梅幸薫伽羅」(千代萩)にて姉八汐、仁木弾正、切狂言「義経千本桜」にていがみの権太を勤め、初日より大入りを成した。

翌6月は、海老蔵四男市川猿蔵との親子共演である。前狂言「菅原伝授手習鑑」(唐渡より寺子屋迄)にて、海老蔵は伯母覚寿、藤原時平、孔雀三郎、舎人松王丸、猿蔵は、宿禰太郎を勤め、切狂言「与話情浮名横櫛」にて、海老蔵は和泉屋多左衛門、猿蔵は八代目の当たり役、伊豆屋与三郎後二向疵ノ与三を勤めた。

伊勢古市の芝居が千秋楽を迎えると、海老蔵は名古屋に赴き、若宮芝居に6月下旬から7月の期間、「高麗屋幸四郎」の名で出演している。(名代：松本屋増太郎、太夫本：中村津多右衛門)なお、猿蔵もまたこの時同行していた。

6月24日から、前狂言「梅幸薫伽羅」(大序より御殿迄)にて、海老蔵は山獵師木場七実八赤松太郎、仁木弾正直則、妹八汐、猿蔵は、六部快弓実八片嶋宗十郎を勤め、「鬼一法眼三略巻」(三段目)にて、海老蔵は吉岡鬼一法眼、猿蔵は源の牛若丸を勤め、「与話情浮名横櫛」にて、海老蔵は、古市芝居の時と同様に和泉屋多左衛門、猿蔵もまた向疵の与三を勤めた。

翌7月は15日から29日まで開催された。前狂言「織合襦袢錦」にて、海老蔵は春藤次郎右衛門を勤め、「ひらかな盛衰記」(逆櫓の場)にて、海老蔵は舟頭松右衛門実八樋口次郎、猿蔵は秩父重忠を勤め、切狂言「お染久松色読販」にて、海老蔵は鬼門ノ喜兵衛、成田屋七左衛門、猿蔵は丁稚久松、娘おそめを勤めた。

(8) 駿河国における海老蔵の芝居興行は、天保3年(1832)7月の遠州見付宿宣光寺(現静岡県磐田市)興行があげられる。天保3年(1832)3月、團十郎を八代目に譲り、五代目海老蔵と改名後初と思われる江戸以外における芝居興行である。興行記録を記した『庚申講掛帳』によれば、海老蔵は、市川蝦十郎、市川宗三郎(海老蔵門弟)、市川三之丞、市川銀兵衛(海老蔵門弟)、市川舩蔵(海老蔵門弟)、吾妻藤蔵等と共に一座を組んで乗り込んだ。一座の興行は、宣光寺において、7月24日より20日間であった。

曹洞宗珠玉山宣光寺の境内には、常設の芝居小屋が存在した。上演演目は、「義経千本桜」「ひらかな盛衰記」「神霊矢口渡」「五大力恋緘」「一谷嫩軍記」「菅原伝授手習鑑」であった。海老蔵は、「五大力恋緘」にて源五兵衛、「一谷嫩軍記」にて熊谷次郎直実、「菅原伝授手習鑑」にて松王丸を勤めた。海老蔵一座の当興行は、まれな大入りを見せ、駿河・三河よりも見物の群集があり、この一座は三州岡崎でも大当たりし大好評を博した。

(9) 海老蔵の東海興行を検討していくと、駿河国富士郡神谷村の眼科医で海老蔵の支援者である伊達家の存在が浮かび上がる。たとえば、海老蔵が、天保14年5月14日からの伊勢古市の芝居に出演する以前に伊達家へ立ち寄って、世話になっていたであろうことが伊達家所蔵の八代目から送られた書状からうかがえる。さらに、今後も伊達家の資料の調査を進展させれば、海老蔵の東海地域の芝居興行を支える伊達家の具体的な支援活動の実態も、これまで以上に鮮明に捉えることができると予測された。

(10) これまでは、ただ海老蔵が東海地域で芝居を開催していたという事実の指摘程度で、それがどの芝居小屋でどの位の日数開催されたのか、演目は何だったのかなど体系的に示されていなかった。しかし今回、各所蔵機関に散在していた史資料を収集して検討した結果、海老蔵の東海地域の芝居興行について、開催小屋、日程、演目、役柄、共演者など具体的に判明したことが、本研究の成果としてあげられる。この成果は、これまで言及が乏しい海老蔵の地方興行についての研究の一端を担ったと考えられる。

また、海老蔵が出演した尾張名古屋の若宮芝居、橘町の芝居、熱田亀井山御境内の芝居、伊勢古市の芝居の太夫本に中村津多(津田・蔦)右衛門という人物が関わっていることが明らかとなった。三代目中村仲蔵の『手前味噌』に若干登場しているように、津多右衛門の存在自体は以前より知られているが、実際にどのような人物で、どのような役割を果たしていたのかなど不明な部分が多い。津多右衛門と海老蔵の関係がどのように築き上げられたのか、津多右衛門と東海地域の興行を取り仕切っている太夫本同士の相関関係についてなど、詳しい調査が今後の課題となってきた。

引用文献

守屋毅『近世芸能興行史の研究』(弘文堂、1985年9月)

池山晃「天保改革以後の名古屋歌舞伎」(『近世文藝』50号、1989年6月)、34-46頁

神谷朋衣「近世の東海地方における地域文化の形成 歌舞伎・浄瑠璃の受容と地芝居の上演を通じて」(『早稲田大学総合人文科学研究センター研究誌』01、2013年10月)、200-189頁

木村涼『七代目市川團十郎の史的研究』(吉川弘文館、2014年2月、[2014年5月に再版])

木村涼「五代目市川海老蔵と美濃国伊奈波神社境内興行」(岐阜女子大学『文化情報研究』

Vol. No.1、2016年12月)、13-19頁

木村涼『八代目市川團十郎』(吉川弘文館、2017年1月)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 木村涼	4. 巻 35号
2. 論文標題 十一代目市川海老蔵時代を振り返る	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 成田屋倶楽部会報	6. 最初と最後の頁 22～29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木村涼	4. 巻 Vol.1.No.2
2. 論文標題 岐阜地域の芝居興行に関する資料デジタルアーカイブの進展を目指して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 デジタルアーカイブ研究報告	6. 最初と最後の頁 28～34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木村涼	4. 巻 89号
2. 論文標題 七代目市川團十郎襲名をめぐって	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 法政史学	6. 最初と最後の頁 57～77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 木村涼
2. 発表標題 静岡県富士市伊達家所蔵の市川團十郎関連資料のデジタルアーカイブについて
3. 学会等名 第14回デジタルアーカイブ研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 木村涼
2. 発表標題 信濃国川路地域の芸能資料デジタルアーカイブについて
3. 学会等名 デジタルアーカイブin岐阜
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 木村涼
2. 発表標題 江戸時代の歌舞伎興行に関する資料デジタルアーカイブの充実を目指して
3. 学会等名 デジタルアーカイブ学会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 旅の文化研究所	4. 発行年 2017年
2. 出版社 現代書館	5. 総ページ数 256 (111 ~ 139)
3. 書名 旅の民俗シリーズ第二巻 寿ぐ	

1. 著者名 大石学編	4. 発行年 2017年
2. 出版社 清水書院	5. 総ページ数 511 (162 ~ 173、226 ~ 240)
3. 書名 悪の歴史 日本編 下	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----